

Charmian should know that by now" (p. 171)。Godfrey を自由にしようとした Taylor の裏切り行為は、50年以上仕えてきた Charmian との関係から彼女自身を解き放つことをも意味していたのであった。

この小説は死と隣り合わせに生きている老人たちの物語である。"You must die" ということを忘れないようにしたらよいではないか、と Lettie に助言する Taylor は、この物語の "wisdom" を "embody" している人物なのだが、<sup>17</sup> その彼女も老人病棟の Granny Barnacle の死に接して泣き崩れるしかないのである。事実、この小説には、Lisa の火葬（三章）、Trosky おばあちゃんと Barnacle の死（四、九章）、Tempest の死亡記事（八章）、Lettie の殺害（十三章）、O'Brien の死（十六章）と、死が随分と言及されている。だが小説は決してしめっぽくないし、暗くもない。老齢に付随するとされる、あの "sense of calm and freedom" (p.188) から遠い所に老人たちはいる。作者は、無駄のない、「走りすぎることの無い」(*pas de zèle*) 筆使いで、フラッシュ・バックを利用しながら老人たちに昔を振り返らせてそれを一年間にわたる現在時の生活に重ね合わせ、"stubborn and animal vitality"<sup>18</sup> を持つ彼らが、若き日々の種々の欲望を依然として引きずっている姿をあざやかに描いた。

老人たちの生態を観察・記録してきた科学的資料を火事で焼失して意気消沈した Alec に、Taylor はこう告げている。

'We all appear to ourselves frustrated in our old age, Alec, because we cling to everything so much. But in reality we are still fulfilling our lives.'

(p. 218)

この Taylor の見方こそ Spark が読者に共有してほしいものだったであろう。

---

17 Norman Page, *Muriel Spark*, p. 24.

Taylor こその小説のヒロインだとして Page は彼女を次のように評している — "Jean Taylor is the real heroine of the story, a figure of dignity and fortitude, and of faith undiminished by suffering, 'the only problem' to which Muriel Spark was to return in one of her late novels. Like other truth-tellers it is Jean's fate not to be believed by those who are imprisoned in their own worldly personalities and convictions, whether self-indulgent, authoritarian or rationalist." (*Ibid.*, p.25)

18 Goronwy Rees, "New Novels", in *The Listener*, April 2. 1959.

gaged in a war” (p. 37) と Lettie に言った Taylor は、重症の老人病患者たちを見ながら、“That is our memento mori. Like your telephone calls” (p. 168) と Alec に告げているが、彼女は死という不可避の現実を毎日直視することから逃げることはしていない。作者は一章でまず病院の外の世界での匿名電話の出来事を扱った後、二章で Taylor に目を転じ、三章で Lisa の葬式を描いた後、四章でまたその様子を Lettie から Taylor が聞く場面に進む。このような形で Taylor は六章、九章、十三章に登場するが、小説は、死について “meditate” する彼女の姿で終わっていて、作者は Taylor を視点的人物にすえようとしたと断じてよいであろう。

ひどい関節炎を患っている Taylor は、匿名電話、色事、遺産といった目の前のことに気を取られて外をせわしく動き回っている Godfrey や Lettie と対照的に、病院に釘づけなのであるが、昔 Mrs Pettigrew が女主人 Lisa をゆすったことを知っているから、彼女を雇うことが Godfrey と Charmian にとってどんなに悪い影響を及ぼすか見通すことができた。その Taylor が、Godfrey を置いて私立老人ホームに自分だけ逃げ込んだ Charmian の秘密をなぜ Godfrey に告げてしまおうとするのか、彼女自身 Alec にこう説明している。

‘I see it is necessary that Godfrey Colston should stop being morally afraid of Charmian — at least it is worth trying. I think, if he knows of Charmian’s infidelity, he won’t fear any disclosures about his. Let him go and gloat over Charmian. Let him —’ (p. 171)

過去50年以上 Godfrey を巧妙に支配してきた妻の生霊からの解放だけでなく、これから彼に取りつこうとする Mrs Pettigrew という次の桎梏から彼を自由にすることになるのだが、それはまた30年前の Charmian—Guy—Lisa という三角関係の悪夢再来を阻む決断であった。<sup>16</sup> 貴女を信頼していた Charmian はショックを受けるだろうと心配する Alec に対して、Taylor はこう答える — “There is a time for loyalty and a time when loyalty comes to an end.

---

16 Charmian に Guy とのことを知っているとはのめかした Godfrey は、自分を豚のように感じさせてきた妻の “air of purity” を引き裂き、“She had no call, now, to be uppish and righteous” と満足を覚え、更に自宅に戻ると Mrs Pettigrew を首にし、息子 Eric に出て行けと自己主張する自信を取り戻すのだが、Guy の場合と同様、作者は、その時 Lettie の死を彼に告げるという逆転を用意している。

あと1926年に再び2人の関係が始まり18ヶ月間続いた。この二人の恋愛を嗅ぎつけた Lisa Brooke が Charmian を恐喝、Guy は Lisa と秘密に結婚することで Charmian をスキャンダルから救ったのであった。それから30年後の今、老人ホームに Charmian を訪ねた Guy は、Godfrey を Mrs Pettigrew の支配下に置いてきたことを気に病む Charmian に対して大きな不満を感じ、そこを退出する時に Charmian の “ingratitude” を思う —— “He doubted if Charmian ever thought with gratitude of his action. Still, he adored Charmian. . . . he adored Charmian for what she had been and what she still really was. And he had earned Lisa’s money” (p. 189)。辛辣な批評家でありながら Charmian に対しては騎士道的でロマンティックな Guy の思いは、50年前、30年前もそうであったろうと私たちに想像させる。Guy は Lisa の遺産が転がり込んで来たと信じ込んで満足感を味わうのだが、Lisa が彼より前に O’Brien と結婚していたことがわかって結局彼は一銭も手にできない。その O’Brien も Mrs Bean の100歳誕生祝いの前日に死亡し、遺産は Mrs Pettigrew のものとなる。作者は自己満足的な願望を抱く人物の生き方をつき崩していく。過去を “the rosy glow of nostalgia” で色どる Charmian の場合も、天使的貞淑さを装って操縦していた筈の夫 Godfrey に50年以上秘密にしていた Guy との関係を知られてしまうのである。

#### IV

Spark は登場人物たちの内面に入って心理を叙述することはしないし、また彼女の乾いたユーモアが、 “the characters’ estimates of their own importance are often misdirected and wildly out of proportion”<sup>14</sup> と私たちが認識することから生きてくることを考えると、作者の視点と重なる人物は登場してこないのではと予想されるのだが、Jean Taylor がそれに近い。Bradbury の “a psychological centre in a given character tantamount to sympathy”<sup>15</sup> が Taylor に付与されている。 “Being over seventy is like being en-

14 Ruth Whittaker, “‘Angels Dining at the Ritz’: The Faith and Fiction of Muriel Spark”, in *The Contemporary English Novel*. p. 170.

15 Malcolm Bradbury, “Muriel Spark’s Fingernails”, in *Possibilities : Essays on the State of the Novel* (Oxford Univ. Press, 1973), p. 249.

‘Why does one behave like this, why?’ he asked himself as he drove into the King’s Road and along it. ‘Why does one do these things?’ he thought, never defining, however, exactly what things. ‘How did it start, at what point in one’s life does one find oneself doing things like this?’ And he felt resentful against Charmian who had been, all her life with him, regarded by everyone as the angelic partner endowed with sensibility and refined tastes. As for oneself, of Colston’s Breweries, one had been the crude fellow, tolerated for her sake, and thus driven into carnality, as it were. (p. 91)

何時から自分はこんな風になったのかと思案する Godfrey は、人気作家として世間の同情・共感を享受し、しかも彼女自身 “air of purity” を装っている Charmian に対し、55年以上に及ぶ結婚生活において、たえず劣等感に悩まされ、プライドを傷つけられ、Lisa の他に Wendy Loos, Eleanor と浮気をしてささやかな抵抗を試みたのであった。彼女の人氣が上ると反比例で彼は落ち込むというのが、二人の生活のパタンになってしまっていたのである — “having made the mistake of regarding Charmian’s every success as his failure, now, by force of habit, he could never feel really well unless she were ill” (p. 155)。妻の作品がリバイバルの波にのって再び人氣がでてきた今、その成功を Godfrey は2人の女の太股のくつ下留めを見ることへの自己正当化に利用している。浮気が妻のせいだとした昔の Godfrey の生き方が現在の彼の態度と見事に重ね合わされているのである。

Mrs Pettigrew が Godfrey の家に雇われたことから、彼女と Charmian とのいじめと反抗の関係、彼女と Godfrey との色と欲の関係といったように、この物語の新しい人間関係が形成されるのだが、同時にそれは彼女と Lisa との関係、Godfrey の浮気など過去の間関係の有り様を垣間見せてくれる。上に触れた Godfrey と Charmian の関係は、現在を描きながら人物が昔を思い出すフラッシュ・バックを使って過去を映し出す、作者 Spark の時間の巧みな技法を示してくれている。それは、入院費用を出すのをしぶる Godfrey の願いを切りすて、Mrs Pettigrew による毒殺のおどしから私立老人ホームに入った Charmian を、かつての恋人 Guy が訪ねる場面にも窺える。

Charmian の付添いだった Taylor が Alec に話すところによれば、Guy と Charmian との関係は1902年から始めて1907年9月まで続き (p. 170)、中断の

ちを集めて手際よく彼らの特徴と関係を紹介しているが、<sup>13</sup> 人物たちの絡みで重要な役目を果すのは Lisa が残した遺産の行方である。Lisa の過去の恋愛関係の秘密を握って遺言書を変更させた Mrs Pettigrew がその財産の殆どを手中に収めるのか。それとも Lisa と秘密結婚をしていたことが判明した Guy Leet が手にするのか。その秘密結婚にからむ事情は何か。また Guy の愛人だった Charmian の付添いになる Mrs Pettigrew がこの人気作家をどういじめるか（それは直接描かれることのない Lisa Brooke いじめの有り様を暗示してくれる）。そして Lisa と恋愛関係があったことをねたに Godfrey に遺言書の変更を迫る彼女は彼の財産をせしめるのか。

主要登場人物の殆どが70歳以上のこの作品において最もよく動いているのは Lisa の元愛人87歳の Godfrey で、自分の“faculties”が正常に作動していることへの偏執ぶりはすさまじく、他人のそれが弱まっているのを見て大いに悦に入るのが常である。彼も妹 Lettie と同じく匿名電話にショックを受けるのだが、それ以上に彼を悩ませるのは、高齢になっても抑えきれぬ性的欲望である。Godfrey はこの3年間、詩人 Percy Mannering の孫娘 Olive Mannering（24歳）をこっそりアパートに訪問し、Lettie や Charmian の近況をおしゃべりしながら、Olive がさりげなくみせる suspender-tips を見ては、おこづかいをやっている。そして今度はまた妻の付添い Mrs Pettigrew のくつ下留めを1ポンドでながめることをやめることができない。自尊心の強い彼は、過去の浮気は勿論のこと、そのような行状を妻 Charmian に知られるのを恐れてビクついているのだが、作家である息子 Eric が人生の敗残者になったのは母親である妻のしつけが悪かったからだともみなすのと同じく、自分が色欲にかられるのも妻が世間から上品で身も心も美しい人だとみられていたためだと、責任を転嫁する。

---

13 Spark は、登場人物として何らかの利害関係のある少人数グループの人たちを導入するのを得意としていて、従ってこの葬式のようなものは、人物たちを集め、紹介するのに便利がよいのであるが、*Symposium* (1990) においては一章で10人出席の dinner-party が開かれている。*Memento Mori* では葬式に集まった人たちのそれから1年間の動向が、彼らの過去と絡んで描かれるが、*Symposium* で Spark は二章から三週間前、二週間前、二年前、パーティ直前と時間を溯らせながら10人の仕事、素姓などを描き、出席予定の11人目の Hilda 殺害を同時進行の形で、再び同じパーティが描かれている最終章（パーティはテンスが現在形の文で描かれる）に持ってきている。

ろうとしている人たちの中に犯人がいます」とい、遺言書を書きかえてばかりいる。ついには元警部 Henry Mortimer まで疑い、電話を受けた他の老人たちを「目かくし」に使っているとし、甥の Eric と共犯だとまで考えるに至る。自分が唯一、一番の被害者と見なしたい自己中心性を持つ彼女は、そのメッセージに従って死を忘れないようにしたら、と忠告する Taylor に向かって “I do not wish to be advised how to think” (p. 39) と答える。Alec をめぐる両者の50年に及ぶ反目があることも手伝って、高飛車な Lettie は、求めていた気休めを手にすることができない。次に老人病棟を訪れた Lettie は、新たに収容された重症の老人病患者たちの姿に耐えきれず “too disturbing” (p. 172) と言う。まわりの患者たちを “our memento mori” (p. 168) と受け容れることのできる Taylor と対照的に、 “pioneer penal reformer” (p. 141) として O.B.E. を授与された Lettie は “will” で人を操り罰するのは好きだが、死を直視することはできないのである。ついに彼女は電話線を切って、外界との接触を断つのであるが、辞職した若い女中の Gwen がボーイフレンドにそのことを話し、<sup>12</sup> それが強盗仲間に伝わり、Lettie は殺害されてしまう。死から逃げようとして逆にそこへ追い込まれてしまったのである。

### III

この作品の物語展開の起点は確かに「死を忘れるな」の電話で、老人たちの反応を通して、過去を引きずっている彼らの現在の生き様を知ることができるのだが、この小説の “memento mori” は電話だけではない。既に触れたように老人病棟の「おばあちゃん」たちの動けなくなった肉体も “memento mori” であるし、その死が生き残っている人たちにとって「死を忘れるな」のメッセージなのである。物語の展開において電話以上に、重立った登場人物たちの人間関係を、50年も時間を遡った過去のそれをもよみがえらせながら、浮かび上がらせるのは、具体的なある人物の死、恋多き女であった Lisa Brooke の死である。作者は、三章において Lisa の火葬とその後の茶会を描き、主要な人物た

---

12 Norman Page は、Robinson と *The Bachelors* の Patrick Seton の類似に触れながら、 “Muriel Spark tends to repeat character types with variations, so that a figure in one novel appears like a sketch for a later one” (*Muriel Spark*, p. 19) と指摘しているが、ここの女中 Gwen の情報屋的働きは *Symposium* において金持の家で女中代りに働きながら彼らの動向をさぐる “domestic informer” の Luke を思わせる。

‘Charmian Piper — that’s right, isn’t it?’

‘Yes. Are you a reporter?’

‘Remember,’ he said, ‘you must die.’

‘Oh, as to that,’ she said, ‘for the past thirty years and more I have thought of it from time to time. My memory is failing in certain respects. I am gone eighty-six. But somehow I do not forget my death, whenever that will be.’

‘Delighted to hear it,’ he said. ‘Good-bye for now.’

‘Good-bye,’ she said. ‘What paper do you represent?’

But he had rung off.

(p. 127)

この直後に Charmian が自分で tea をいれるという感動的な場面が続く。それだけに上のやりとりの受け取り方が微妙になる。Norman Page はこう解説している — “Godfrey’s wife Charmian, a former popular novelist who is near senility in the early part of the story but regains a grip on life as it progresses, is a Catholic who shows a calm acceptance of the inevitable ”<sup>11</sup> しかし Charmian は相手を新聞社の記者位にしか思っていない。Spark は最初に Charmian を登場させた時から自分を称える記事を書いた記者のことを匿名電話に関連して彼女に口にさせているし、その声の主を “a very civil young man” と彼女は思っていると書いている。昔から貞淑を装いながら、夫の Godfrey を筆頭にまわりの男たちが自分を大事にし賛美してくれるのを当然と思い込んでいる Charmian の側面をも、ここのやりとりは暗示しているのであって、Taylor や Mortimer のように “It [Death] should be part of the full expectancy of life” (p. 150), “To remember one’s death is, in short, a way of life ” (p. 151) と真面目に考えているわけではない。だからといって、50年以上にわたって隠していた1902－1907年と1926年の Guy Leet との浮気を Godfrey から知っているぞとほめかされて, “I should like a cigarette” と居直る彼女の魅力が少しも減じるわけではない。

上記の老人たちに対し匿名電話に最も強い衝撃を受けるのは Dame Lettie である。猜疑心が強く、権威をふるうのが得意な彼女は、遺産を分け与えてや

---

11 Norman Page, *Muriel Spark* (“Macmillan Modern Novelists” Series, Macmillan Education Ltd, 1990), p. 23.

ant situation, and going quite blank where it was concerned. If, for instance, you had asked her whether, eighteen years before, she had undergone a face-lifting operation, she would have denied it, and believed the denial, and moreover would have supplied gratuitously, as a special joke, a list of people who had 'really' had their faces lifted or undergone other rejuvenating operations. (p. 154)

なにげない顔の整形手術への言及はこの20年間の彼女のずる賢く、たくましい生き方を暗示しており、73歳なのに60歳代を装って Godfrey に色欲をおこさせ遺言書を書き換えさせようとする大胆さを納得させる。<sup>10</sup>

また辛口の批評家 Guy Leet と詩人 Percy Mannering の電話主に関する意見も面白い。前者が試験勉強をし過ぎている “a youngster of school age” (p. 192-93) だと言うと、電話に出た詩人は “it was a strong mature voice, very noble, like W. B. Yeats” (p. 193) と述べ、Guy の家に3週間滞在し、“Memento Mori” のソネットを書く。この二人は昔から論敵のようで、Guy が雑誌に発表している「回想録」に Percy がかみついて、Dowson や Henry James 評価をめぐる昔のいさかいを蒸し返す。Lettie と Taylor の場合同様、現在が過去との関係を浮かび出しているのである。

「死を忘れるな」の電話に見事な答を返すのは Charmian である。Mrs Pettigrew という根性の悪い付添いにいじめ、おどされる彼女は、精神的に反発しようとしたお陰で少しずつ “mental recovery” をなしとげている。電話への応対は実に余裕がある。

‘Is that Mrs Colston?’

‘Yes, speaking.’

---

10 Peter Kemp は電話の主よりもそれに対する反応が大事なのだとし、 “the authorship of the calls is not, or should not be, the focus of interest....What is important, what must be authentic, is the nature of response to the unpalatable fact broadcast so widely and disturbingly” と述べた後、Mrs Pettigrew の反応について次のような解説を付している — “degrees of refusal to accept the chastening fact and implications of mortality are made to stand in direct proportion to differing degrees of moral corruption.” (*Muriel Spark*, “Novelists and Their World” Series, London : Paul Elek, 1974, pp. 40-41)



上にみてきたようにこの小説の現在時は1958年9月から翌年の9月におよんでいるが、話を出発進行させるのは本の題名通りの「死を忘れるな」の電話である。私たち読者も最初は、疑心暗鬼の Lettie 同様、犯人は誰れだろう、という興味をかきたてられる。一体 Robinson は島のどこに行ったのか、誰れが彼を殺したのか (Robinson, 1958), Brodie 先生を裏切ったのはどの女生徒か (*The Prime of Miss Jean Brodie*, 1962), Lise を殺すのはどの男か (*The Driver's Seat*, 1970), Mrs Murchie と尼僧の不可解な死は誰れが原因なのか (*Symposium*, 1990) など、確かに Spark には “whodunit” 的要素がある。Charles Hoyt は Spark が Agatha Christie や Dorothy Sayers といった女流ミステリィ作家にいくらかは影響を受けているのではないかと、*Memento Mori* にみられる “blackmail” “murder” “intimidation” に言及している。<sup>9</sup> ただこの電話の男性の声は、耳にする人たちによって種々さまざまで、ついには元警部にかかってくるのが女性のそれになり、結局、正体はわからないままである。Henry Mortimer 自身が自宅に相談にきた老人たちに “the offender is, in each case, whoever we think he is ourselves” (p. 152) と述べているように、電話の受け取り方がその当人のある側面を映し出している。

例えば老人たちを科学的に観察し、その生態の正確な記述を重んじる Alec は、“Remember you must die” と告げられた時、動揺することなく応じる—“Would you mind repeating that?” (p. 138)。そして “Query: mass-hysteria” とメモをとる。また自分が仕える主人たちの秘密を嗅ぎ取って恐喝し遺産取りに精を出す Mrs Pettigrew は不愉快なことを忘れ去るのが得意で、この匿名電話は受けたことがないと平気で嘘をつける心臓の持主である。

Mrs Pettigrew, though she had in fact, one quiet afternoon, received the anonymous telephone call, had chosen to forget it. She possessed a strong faculty for simply refusing to admit an unpleas-

---

8 TLS の *Memento Mori* 書評は、本論の冒頭に触れているように4月17日に出たが、*The Listener* の書評は1959年4月2日号に掲載されているので、小説は多分3月に刊行されたと思われる。最終章をこの年の9月に持ってきたのは “memento mori” の電話の存続をほのめかしたいという計算が Spark に働いたからであろう。

9 Charles Alva Hoyt, “Muriel Spark : The Surrealist Jane Austen”, in *Contemporary British Novelists*, ed. Charles Shapiro (Southern Illinois Univ. Press/Feffer & Simons, 1969). p. 131.

はっきり言及されている年と老人たちの年齢から大体推定できるようだ。匿名電話のことを話す Lettie に “You might, perhaps, try to remember you must die” (p. 38) と忠告した Taylor は、犯人を捕えることしか考えていない Lettie に支離滅裂に陥っていると思われてしまうが、Lettie が去った後、昔のことを思い出す。年下の社会学者 Alec Warner と恋仲になった1907年のことである（4章、40頁）。当時2人は31歳と28歳であった。<sup>7</sup> 身分違いで実ることのなかったこの恋愛事件の後、Alec は Lettie と婚約するが結局解消となり、以来 Taylor と Lettie との間には「敵意」(enmity) が生じていて、50年後の今も、見舞いをうける Taylor はそれを感じている。過去は現在の中に生き延びているのである。その Taylor はもう82歳で、Alec も79歳 (pp. 15, 58), つまり51年が経過しているわけで、物語が始った時点は1958年とみなすことができる。

この小説は全16章からなるが、終りから二つ目の章、つまり15章において、約一年前の3章に葬式が行われた Lisa Brooke の秘密結婚が判明する。73歳で火葬にふされたこの老婦人は、死ぬ一年前に自分がかんりの病気だと感じて “reform her life” を決心した。Spark の乾いたユーモアはこう続けている—— “reminding herself how attractive she still was, offered up the new idea, her celibacy to the Lord to whom no gift whatsoever is unacceptable” (p. 21)。Godfrey の愛人だったこともあり恋愛関係暴露をねたに Charmian から Guy Leet を奪ったこの恋多き Lisa は、1918年にアイルランド人 Matthew O'Brien と秘密裡に結婚していたのだ。そして自分を神だと信じていた O'Brien は1919年から “for more than forty years” (p. 208), Folkstone の精神病院に収容されていたのであった。この点からも、Bean 夫人の誕生祝いが述べられる最終章の9月は、1959年、つまり *Memento Mori* の出版年と同じ年の9月になるわけで、Virginia Woolf が *Orlando* を、出版日の1928年10月11日で締めくくったことを思い出させる。<sup>8</sup>

---

6 Mrs Anthony, now widowed, had a legacy from Charmian, and has gone to live at a seaside town, near her married son. Sometimes, when she hears of old people receiving anonymous telephone calls, she declares it is a good thing, judging by what she has seen, that she herself is hard of hearing. (p. 219)

7 この年齢は、老人病研究家 Alec が老人医療病棟に Taylor を訪ねる6章の71頁に記されているが、70頁には “that month of July 1907” という句がみえる。

‘Being over seventy is like being engaged in a war. All our friends are going or gone and we survive amongst the dead and the dying as on a battlefield.’ (p. 37)

作者Sparkは、「死を忘れるな」のささやきを実際に電話で聞かされる老人たち、Taylorのようにそれを心の中で聴いている老人たちの今を描き始めたところである。Taylorの発言にあるように戦場にいる兵士の如く、老人たちは生きのびようとしている。そして彼らの今は、その背後に青春時代から約50年に及ぶ過去を引きずっているのであって、作者は人物たちが思い出す昔を、目の前に展開されようとする現在の中に織り込むことによって彼らの生きざまを浮かびあがらせようとする。

## II

Kermodeと対談した折のSpark自身のことばを借りると、「頭に浮かび」「数秒後に書き留めた」進行中の物語の出来事が、この*Memento Mori*でカバーしている時間はおよそ一年間である。小説の冒頭でLettieが9度目の電話を受ける日時は記されていないが、彼女が老人病棟にTaylorを訪ねて、火葬にふされたばかりのLisa Brookeの遺言書の噂、Lisaの家政婦だったMrs PettigrewをCharmianの付添に雇う件、そしてこの電話のことなどを話し合う場面では、“the warm September afternoon”という句がみえる(4章、35頁)。そして11章で“memento mori”の電話を受けた老人たちが引退した元警部のHenry Mortimerを訪問する件が描かれるが、それは一冬こした「4月」のことで、その折Henryが読んでいる新聞記事に“anonymous telephone calls from a male hoax-caller since August last year” (p. 141) という文があるので、6週間にわたって断続的に8回の電話を受けていたLettieの登場を9月としていいであろう。そして最終16章では、9月生れのMrs Beanの100歳の誕生日祝いが描かれることになるので、この小説の話そのものは大体一年間にわたっていると思って間違いない。ただ話が始まった時すでに「死を忘れるな」の電話が1ヶ月余続いていたように、小説が終る時点ではまだこの電話は続行中であることが、Charmianからいくらかの遺産を貰った女中Mrs Anthonyへの言及に示されている。<sup>6</sup>

問題は何年の9月が起点か、ということだが、明示されてはいない。しかし、

express it in the past tense, but in the actual process, as far as I am concerned, it happens in the present tense. Things just happen and one records what has happened a few seconds later. I don't mean, of course, that one is that recording instrument that Blake thought of himself, just a kind of medium between the angels and the creatures, but I do know events occur in my mind, and I record them. Whether it fits in with this theory, that theory, this myth, that myth, has nothing to do with me.<sup>4</sup>

*Memento Mori* の一見無頓着な語り口をうなづかせる発言であるが、同時に彼女は、“I think the best thing is to be conscious of everything that one writes” と言っていて、最初の章の小気味よい人物間のやりとりは、Jane Austen の *Pride and Prejudice* 第一章の Bennet 夫妻の会話のように、的確な情報だけでなく話している当人たちの心の動きを伝えてくれる。“legendary figure” と評されるほど人気のあった作家 Charmian の不肖の息子 Eric に対する Lettie と Godfrey の言及、自分の “faculties” に自信はもっているものの妻 Charmian を扱いかねている Godfrey、警察に疑いの目を向けている Lettie、何かというと Taylor という名を口にする Charmian など、作者はかなり巧妙に伏線をはっている。Spark 自身、Mary Shelley の *Frankenstein* を論じた折に、その欠点の一つとして出来事の連絡の弱さを指摘した程だから、<sup>5</sup> *Memento Mori* のプロットの流れについては油断を怠らなかった筈である。

ひどい関節炎に動くこともままならぬ82歳のカトリック教徒 Jean Taylor は、ぼけのひどくなった Charmian のために Mrs Pettigrew を付添いにどうだろうかと相談にきた Dame Lettie に対し、Pettigrew 夫人が亡くなった雇い主 Lisa Brooke に対しても “domineering” だったことで、その提案に反対するが、その時 Lettie に対しよう述べる。

---

4 Frank Kermode, “The House of Fiction,” in *The Novel Today : Contemporary Writers on Modern Fiction*, ed. Malcolm Bradbury (Fontana, 1977), p. 134.

5 “the chain which links important events together is weakened by improbable situations” (Muriel Spark, *Mary Shelley*. London: Constable, 1988, p. 171) この本は1951年刊行された *Child of Light: A Reassessment of Mary Shelley* の改訂版である。

脳卒中のあと言葉と時間の感覚が鈍くなった85歳のかつての人気作家 Charmian と、妹を迎えに車で出かけようとする Godfrey とのちぐはぐなやりとりが一頁ほど続いて、ぼけがひどくなった妻を扱うのは大変だ（‘One has one’s difficulties with Charmian’）という彼の思いが言及された後すぐ星印、87歳の Godfrey の乱暴な運転に肝を冷やしながらその兄の家に向う Lettie が車の中で彼と会話をする場面が一頁半ほど続いて星印。兄の家について Lettie、その彼女を一年ほど前まで家にいた付添いの Taylor そして夫 Godfrey を息子 Eric と勘違いする Charmian、*Times* を読んでいる時に「Dame Lettie に、“remember she must die”とお伝え下さい」という電話を受けた Godfrey、すぐに警部補に連絡する Lettie が二頁位きびきびと描かれ、入室してきた女中の Mrs Anthony と Charmian の以下のやりとりで一章が終る。

Mrs Anthony came in to clear the table.

‘Ah, Taylor, how old are you?’ said Charmian.

‘Sixty-nine, Mrs Colston,’ said Mrs Anthony.

‘When will you be seventy?’

‘Twenty-eighth November.’

‘That will be splendid, Taylor. You will then be one of us,’ said Charmian. (p. 14)

二章は女中に間違えられるこの Taylor が入っている病院の老人病棟の場面から始まり、12人の「おばあちゃん」(Granny) の紹介、特に Lettie の訪問を受けた当の Taylor が詳しく、といっても二頁ほどだが、紹介される。

いきなり、出だしの一章を長目に触れたのは、人物や状況の内容説明を最低限に抑えたきびきびした地の文、速いテンポで展開される会話、といった Spark の特色に目を向けるためであったが同時に注目したかったのは場面転換の手際のよさである。話の進め方に、作家の心に浮かんだままがその通り書き記されているような錯覚を感じさせる、「なにげなさ」(nonchalance) が支配的であるように見える。Frank Kermode が1963年春季号の *Partisan Review* (30号) に発表した“The House of Fiction: Interviews with Seven English Novelists”の中に、彼と対話した Spark の次のような発言がある。

I think that the novelist is out just to say what happened. I

The telephone rang. She lifted the receiver. As she had feared, the man spoke before she could say a word. When he had spoken the familiar sentence she said, 'Who is that speaking, who is it?'

But the voice, as on eight previous occasions, had rung off.

(p. 9)<sup>3</sup>

Lettieはこの電話が気にさわり、犯人は誰れかと悩み、疑わしい人を自分の遺言書からはずそうと次々とそれを書き換え、ついには電話線をはずしてしまうことになるのだが、Spark は彼女の心理的動揺を内側から描くことはせず、彼女の行動で暗示させる。Lettie はすぐに警部補に連絡をとる。文字通り、二言三言の短いやりとりの後、兄 Godfrey への電話が続く。

A few moments later Dame Lettie telephoned to her brother Godfrey.

'Godfrey, it has happened again.'

'I'll come and fetch you, Lettie,' he said. 'You must spend the night with us.'

'Nonsense. There is no danger. It is merely a disturbance.'

'What did he say?'

'The same thing. And quite matter-of-fact, not really threatening. Of course the man's mad. I don't know what the police are thinking of, they must be sleeping. It's been going on for six weeks now.'

'Just those words?'

'Just the same words — *Remember you must die* — nothing more.'

'He must be a maniac,' said Godfrey. (pp. 9-10)

\*

終りに付された星印が合図となって、妹から電話を受け取ったGodfreyの家庭に場面が変わる。

---

3 *Memento Mori* (Penguin Books, 1976 ; First published by Macmillan, 1959). 以下、この作品からの引用と頁数はこの版に拠り、頁数は本文中に記す。

# Memento Moriにおける時間

吉 田 徹 夫

## I

1959年4月17日の *Times Literary Supplement* の書評は、*Memento Mori* の散文を “a prose which is brilliantly spare” と述べているが、Muriel Spark を論じる際、彼女の “style” がよく言及される。例えば、William McBrien は、Spark が “brevity” を重んじていて、彼女の小説が “brief”なのは説教臭さがないからではないかとした後、“exquisite style keeps the best of her fiction quick, light, Mozartean in manner” と述べ、こう結んでいる — “All evidence of effort is edited out, so that in heeding Beerbohm’s dictum, *surtout pas de zèle*, she achieves a style of great gaiety, grace, and nonchalance.”<sup>1</sup> また Ruth Whittaker は、人物たちの内面に立ち入ってその心の動きを説明することなく、“action” と “dialogue” で状況を呈示しながら物語をてきぱきと前進させる Spark の書き方を “stylistic thrift” と言っている。<sup>2</sup> *Memento Mori* の冒頭から私たちはこの Spark の特徴に出会う。

万年筆のインクをつめかえた Dame Lettie Colston は、作家である甥への手紙に、冷戦時の今日もっと明るいテーマについて書いたらどうなのと三行ほど書いた時に、電話になる。

---

1 William McBrien, “Muriel Spark: the novelist as dandy”, in *Twentieth-Century Women Novelists*, ed. Thomas F. Staley (Macmillan, 1982), p. 154.

2 Ruth Whittaker, “‘Angels Dining at the Ritz’: The Faith and Fiction of Muriel Spark”, in *The Contemporary English Novel*, ed. Malcolm Bradbury and David Palmer, Stratford-upon-Avon Studies 18 (Edward Arnold, 1979), p. 163.